

シベリア日記

新潟県 阿部 栄一

昭和二十(一九四五)年三月三十日第四回目の召集を受け、新発田部隊に入隊最後の現役部隊をフィリピンに派遣させるため補充として会寧に四月十六日、会寧第二大隊として勤務することになりました。満州国側の山中に陣地を造り旧ソビエトの侵入に備えた。

八月十五日降伏命令により満州国のカントウで武装解除させられ千人単位の部隊に分けられ、八月末ポーン市より列車―自動車(アメリカ製)で運ばれました。場所はポーン市より前方のホルモリン地区三〇一大隊収容所でした。収容所とは名ばかりで木の枝を折って床に敷きつめた状態でした。抑留されてから二カ月間野宿生活が続いた。シラミの大発生を見ることがとなり連日ことごとく

医務室に入室者が増加、遂には死者まで発生した。患者数五十人程度でしたが、お隣の三〇四大隊に患者数五百五十人、死者四百五十人の大惨事となりました。発疹チフスと判明した小生も遂に二カ月間入院致す始末でした。その後入浴場も完成し、衣類消毒もできるようになりましたので患者の発生もなくなりました。

その入浴場の責任者となり約二年間勤め、その後ノーチラポータ(夜間作業)を三カ月勤め、わが部隊が造った鉄道に乗り、二十三年七月ナホトカに帰り、二十五日来船、二十七日舞鶴港より帰還してまいりました。